

## 「特別」という幻想

六年 S・Y

「特別な人」が羨ましい、と私はずっと考えていました。

そう考えている人は私だけではないだろうと思います。成績がいいから、才能があるから、あのひとはいいよね。特別だから、私たちとは違うんだよ。神様は不公平だなあ。誰もが一度はそのようなことを口にしたことがあると思います。しかし、このような嫉妬や羨望は何の解決にもならず、むしろ自分が虚しくなっていくだけだ、と、誰しも気付いているはずですし、この考えが捨てられるなら捨てたいと思っているはずですよ。今回の感話では、この考えを捨てたいと思いつつながらもずっと抱き続けていた私自身が今となって考えていることをお話ししたいと思います。

私は自分に自信がなくて相当卑屈な性格であるといえますが、一方では誰からも一目置かれたい、よく思われたいというかなりの見栄っ張りでした。というより、見栄を張って人から一定の評価を得ることで、自信のなさを克服したかったともいえます。英語が少し得意なだけなので自分が失敗した他教科のテストはことごとくひた隠しにしたり、ヴァイオリンを弾くときは学校では弾けるフレーズばかり何度も弾いてよくできているふりをして、その実全く弾けないところは誰にも見つからないように練習したり、感話や読書感想文に信じられないほどの時間を割いて何度も書き直し、上手に見えそうな文書にするべく苦心したりしていたのです。誰の目にも「特別」に映る人というのはどの集団にも一人か二人はいるものですが、私もそうなれば自分に自信が持てるに違いないと思って、そう見られるべく全力を尽くしていました。

ところが誰から何を言われようと、私の自己評価が変わることは一向にありませんでした。私がひねくれすぎているせいか、自分は駄目で無能な人間なのだということだけに関しては揺るぎない確信があり、どんな褒め言葉も勘違いか皮肉のどちらかだとしか思えなかったのです。

皆さんは「自分像」というものについて、考えたことがあるでしょうか。九月の修養会で私は「自分像」というテーマでグループのメンバーと話し合ったのですが、そのときしばしば話題に上ったのが、自分の思う自分と他人から見た自分のイメージの違いについてでした。この自分と他人との間に生じる「自分像」の齟齬は時として自分を苦しめるもので、私もこれに悩まされていまし

た。「頭がいい」「ヴァイオリンが上手」「文章を書くのが得意」などと思われているらしいのも、幻滅されないように死に物狂いで見栄を張っている結果なのだとも自覚していたため、自分では特別な人だと思われたいと考えていながら、誰かにそう思われているらしいことを知ると、騙しているという罪悪感や自責の念を覚えたのです。

ところで「自分像」というテーマを聞いたとき、「像」の一文字から私が連想したのは鏡でした。

人の心を鏡に例えるならば、人の心はみな同じではありませんから、一人ひとりの鏡の形状も異なっているのだと思われます。人によってはへこんでいたり、歪んでいたりするかもしれない。鏡に映るのはあくまでも本体の像なのであって、それがそのまま正しい実物だとは限らないのです。よってその特有の鏡で自分を映すとき、歪みきった人は歪んだ自分の姿しか見ることができませんが、それだけが唯一の自分の姿だと思い込むのは間違いなのだと思います。他の人と向かい合ってその人の鏡に映された時にはじめて、普段見ているものとは違う「自分像」を見ることができないのでしょうか。もちろん人と向かい合ったときに、その人によって逆に歪められた自分像を見せられることもあるでしょうが、百人に出会えば百通りの歪み方があり、いずれにせよ映し出される本体、つまり本物の自分は一人であることに変わりはないのですから、本物の自分はいったいどれなのかなどと悩む必要もないように思います。私たちは様々な人に出会い向き合うことで互いの持つ鏡に自分を映してもらいながら、本当の自分の姿を見極めていく存在なのでしょう。だとすれば他人から見た自分像というものも、自分自身を反映した結果のものなのですから、認めがたいにしても受け入れるべきものなのではないかと思うのです。

加えて、ちょうど後頭部の寝癖を目の前にある鏡で見るとはできないように、一枚の鏡で自分の姿を見られる範囲は限られています。自分の見えない背後の部分を見るためには、最低でも二枚以上の鏡が必要になるのです。そこで、もう一枚の鏡を持つ他人がいて初めて、自分がどのようなものであるかを知ることができるのだと思います。

これらの考えの上に立つと、「特別な人」は本当に羨むべき存在といえるのでしょうか。私は修養会で様々な人と心を開いて話していくうちに、「特別な人」だと思っていた人たちの意外な一面を見て、その人たちに対する考え方が変わったのを感じました。他人に「特別」だと思われるということは、常に「特別」

らしい優れた一面しか注目されないということであり、自分に見えない背後の面があることを認めてもらえない、誰にも鏡に映してもらえないということでもあります。その結果、「特別な人」は押し付けられた理想像に込めるしかなく、自分の「特別」ではない一面を他人に見せることができずに一人で苦しんでいるように思われたのです。この修養会を通して私が気が付いたのは、いわゆる「特別な人」が特別なのではない、私たちが勝手に「特別な人」のレッテルを張り付けてそう仕立て上げているだけなのだということでした。「特別な人」は自分が特別だとは大抵思っていないし、実際のところそうで、私たちがその人の特別ではない一面から目を背けているにすぎません。どうして今まで気が付かなかったのか、と私は思いましたが、それも心を開いて互いを映しあう機会が与えられなかったら気付くことはなかったのかもしれない。

そう考えると、誰の目にも明らかに「特別な人」として映る存在になっても、自分に自信が生まれるとは到底思えなくなりました。それよりも私は、違う種類の「特別」を目指したい、と今となっては思っています。目立った優秀な能力によって大勢の人に「特別」と思われ、自分の背後を覆い隠して生きていかなければならないような「特別な人」ではなく、私という人格が一人ひとりの相手にとっての「特別な人」になれるようにしたいのです。これまでのように他人から見た「自分像」と自分自身を否定して他人を羨みながら生きていくのではなく、相手が秀才でも天才でも一人ひとりと真摯に向き合って、互いの鏡に映る互いの像を受け入れられるような、要するに信頼して自分を打ち明けたり、自分の知らない自分を教えたり教わったりできるような、そういう特別な人になれば、きっと私は自分に信頼が持てるようになるのだらうと思うのです。

先程述べたことですが、自分の見えない部分を見るためには少なくとも二枚以上の鏡が必要だ、というのは要するに、人の助けを借りずには自分を把握することも確立することもできないということです。この、人は人との相互関係の中でこそ自分の像を形成していくことができるのだという事実には、私は嬉しさや感謝のようなものを覚えます。というのも、私は日々たくさんの尊敬する人々に囲まれて過ごしており、この自分を形成するに至るまでに、そのような人々に私の様々な面を気付かせてもらって、助けてもらったからです。

だから私も、とりあえずはこれまでいろいろな人に張り付けた「特別な人」のレッテルをはがし、きちんと向き合ってこの恩を返そうと思います。今年の

修養会のテーマは「光」だったのですが、鏡はまさに光を反射するもので、相手の光を相手に返してあげられるものです。正直私は自分が光のような存在になれるかまだ分かりませんが、他人の光を見つける力はきっと持っていると思います。他人と誠実に向き合い、時にはぶつかり合って鏡の形を変えることもあるかもしれませんが、自分の鏡に映るどんな相手の姿も、相手の鏡に映るどんな自分の姿も、快く受け止められる存在になればと、そう思っています。